



「科学」という言葉 科学≡science

大池 淳一

「科学」の語源は昔の中国で「科学之学」の略語だったとも言われる。日本でよく使われるようになったのは、明治時代に多くの外来語が日本に伝わってきた時に、scienceの和訳として西周（にし・あまね）が当てはめてからだとされている。科学の「科」とは、scienceが様々な「科」に分かれていることに由来するようだ。当時の日本人は体系的な西洋の学問を新鮮に感じ、専門分化することを肯定的に捉えて名付けたようだが、現在では「タコツボ化」を連想してしまう。

science=sci+enceであり、sciは「知」を意味し、enceは名詞化する接尾語である。scienceを直訳すれば「知ること」であり、「知識」とか「学問」という意味が近い。「科学」からはscienceほどの普遍性や根源性は伝わってこない。隠岐さや香氏は著書『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書）の98ページで「科学史の分野では、この『科学』という語のせいで、本来のscienceの意味が日本人に伝わりづらくなったといわれています」と書いている。

例えば「経済」はとても良い意味を持つ。語源は「経世済民（経国済民）」であり、「世（国）を経（おさ）め、民を済（すく）う」という意味だ。多くの日本人が「経済」という言葉を気に入っているようで、経世済民とは無関係な事柄にも日常的に使っている。economicsが日本に伝わった時に、例えば「金銭学」「取引学」などと訳されていたら、イメージが変わっていたかもしれない。ちなみにscienceは、フランス語でもscienceであり、ドイツ語ではWissenschaftである。Wissenschaft=Wissen（知）+schaft（集合）であり、組織化された知を意味する。

「科学」の範囲はどこまでだろうか。「科学」は一般的には自然科学のみを指すことが多い。しかし社会科学（法学、政治学、経済学など）や人文科学（哲学、宗教学、考古学、歴史学、地理学、文学、心理学など）の中で科学的手法を使っている分野を含めて「科学」と表現する場合もある。さらに複数の辞書によると、社会科学や人文科学を含めたすべての学問全体を「科学」と表現する広義の用法もあるそうだが、私は聞いたことはない。学問の分類は大変難しい問題で、「理系、文系」「自然科学、社会科学、人文科学」の分け方がよく知られているが、それではうまく分けられない分野も多くあり、ここでは割愛させていただく。

一方、英語のscienceも自然科学を指すことが多いのだが、もっと広い意味でも使われる。社会科学は英語でsocial science、人文科学はhumanitiesやcultural scienceと訳される。他にもpolitical science（政治学）、legal science（法学）、historical science（歴史学）、medical science（医学）という表現もあり、scienceという言葉は学問全体を指すことも多い。科学とscienceの違いは、もちろん西周に起因するものではなく、自然科学が大きな成果をあげる中で後世の人々が積み重ねてきた結果である。

日本ではずいぶん偉い人でも「私は科学は分からないので…」と言ったりするが、もし欧米で「natural scienceが分からない」ならともかく、「scienceが分からない」と言うとニュアンスがずいぶん違うのだろう。

「科学」と「science」は、気をつけて使いたい。

（理事）

CONTENTS

巻頭言	1
報告 ESOJ2018 / WFSJ総会	2
世界科学ジャーナリスト連盟総会 / 科学報道の未来シンポジウム	4
上映会「おクジラさま」 / 科学ジャーナリスト賞2019	
学振懇談会「科研費の100年」 / 塾開講	

見学会報告 虫嫌いが見た「昆虫展」	6
例会報告（6月）原発事故再検証委員会	7
例会報告（7月）調査報道NPOは根付くか	8
会員だより 文系が取り組んだサイエンスライター	9
オピニオン / WEB編集長から	10
事務局だより	12

世界科学ジャーナリスト連盟

仏トゥールーズで総会

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）は7月10日、仏トゥールーズで欧州科学オープンフォーラム（ESOF2018）が開かれたのに合わせて年次総会を開催した。総会は1年おきに交代で開くESOFと科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）の会場で毎年開催され、今回はESOF2018の2日目に開かれた。欧州を中心に北米と日本の15の科学ジャーナリスト組織から30人が集まり、米国からはオンラインでの参加者も1人いた。日本からは日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）を代表して小出重幸理事、オブザーバーとして私が参加した。

来年スイスで科学ジャーナリスト世界会議

年次総会では、モハメド・ヤヒア会長が挨拶した後、昨年の年次総会の議事録の承認に続き理事会からの報告があった。昨年度の会計報告のほか、ラジオ・カナダのブーシラ・ウアティク氏の新理事への選出承認、さらにWFSJに加盟する組織の数がクロアチアが新たに加盟したことで59に増え、傘下に1万人の科学ジャーナリストを擁するにいたったことが報告された。活動報告ではWFSJが支援・協力するプロジェクトやイベントが紹介された後、今後へ向けての戦略・展望が話し合われた。

2019年7月にスイスのローザンヌで開催される第11回科学ジャーナリスト世界会議は、スイス、フランス、イタリアの3カ国で構成する組織委員会「アルパイン・コンソーシアム」が準備しているが、スイス科学ジャーナリスト協会（SASJ）のオリビエ・デシブール会長が進捗状況を説明した。基調講演やセッションは、組織委員会の15人によって、提案さ



年次総会会場では科学ジャーナリズムと科学コミュニケーションの違いを巡る議論も



左から世界連盟のヤヒア会長とスイス協会のデシブール会長、議長を務めたアンマリー・ルゴー氏
(撮影 いずれも小出重幸)

れている中から絞り込まれる。ジュネーブの欧州原子核研究機構（CERN）をはじめ30カ所の研究機関訪問が企画されているほか、ネットワーキング・イベントにも力を入れているようだ。

年次総会の後半では、活動報告で提起された問題が議論された。特に加盟組織の会費未納が議論となった。WFSJの加盟組織の40%、24組織が会費をまだ納めておらず、その督促など事務手続きがかなりの負担になっているという。そのため、WFSJとして新しい組織運営のあり方を考えるときかもしれないと理事会から提案があった。経済的に厳しい国の会費を肩代わりしたらどうかとの提案には、WFSJの予算に占める会費の割合は小さく、ほとんどは寄付金でまかなわれており、会費はあくまで加盟組織の参加意識を促すためのものであると説明され、単なる金銭問題ではないとの指摘があった。

「批判」と「伝える」巡り議論

もう一つ議論が白熱したのは、米国の参加者からの科学ジャーナリズムと科学コミュニケーションを分けて考えるべきだという提案だ。欧州勢はこれに反論していたが、私は不勉強ながら、このような対立があることを知らなかったので驚かされた。米国では、科学の成果を伝える科学コミュニケーションと、これを批判的に検証する科学ジャーナリズムとは一線を画していると考えているのに対し、欧州ではこの二つが必ずしも対立関係にはないと考えているようだ。日本は欧州の考えに近いと思われるが、改めて科学ジャーナリズムの立ち位置について考えさせられた。

(会員 清水 健)

デジタル革新時代の科学ジャーナリズム

シンポジウムで“光と影”を議論

人工知能（AI）やデジタル技術の革新に科学ジャーナリズムはどう向き合うべきか——。世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）としては初のテーマを掲げた国際シンポジウムが7月9日、仏トゥールーズの欧州科学オープンフォーラム（ESOF2018）に合わせて開かれた。欧州を中心に13カ国から28人の科学ジャーナリストが集まり、朝から昼食を挟んで夕刻まで、プレゼンテーションや提案、熱心な討論が展開された。JASTJからは私とロンドン在住のジャーナリストの清水健氏の2人が参加した。

ロボット記者の実現可能性も議論

主催はWFSJのほか、ナノサイエンスや脳科学など4分野の研究を支援する米国のカブリ財団（The Kavli Foundation）と地球環境研究など科学とジャーナリズムの連携を支援する欧州のルックアウト・ステーション（The Lookout Station）の3団体。欧州最大の科学者組織「ユーロサイエンス」が2年に1回開催する欧州科学オープンフォーラム（ESOF）が7月9日から16日までトゥールーズで開催されており、シンポジウムはその初日に会場近くのホテルで開かれた。

参加者は、英、仏、伊、独、スイス、ポルトガル、デンマーク、ロシア、米国などの科学ジャーナリストで、30歳代の若手からベテランまで、男女の比率もほぼ半々だった。

討論の中心となったのは、以下の3つのテーマ。第一が、さまざまな領域のビッグデータ、公開情報と組み合わせると、どんな調査報道ができるかだ。第二が、AIを駆使した「ロボット記者」はどのく

らい現実的になっているか。第三が、多くの市民がSNSなどのネットにアクセスできるようになった結果、科学的裏付けのないフェイクニュースの拡散が増えている問題だ。いずれの議論でも、デジタ

ル技術の急速な発展がさまざまな領域で科学報道に光と影を投影していることが、実例と共に報告された。

台頭する新しいネットジャーナリズム

特に、科学者とデータジャーナリストが協力して長時間かけてデータの意味する内容を視覚化する、新しいネットジャーナリズムの台頭が印象的だった。その一例が、24時間、360度、自在に中継できるVTRや、地理情報システム（GIS）などの科学データを分析、三次元映像も駆使して視覚的にネット上に展開したケース。例えば、英ガーディアン紙は昨年11月、地球平均気温が3℃上昇すると大阪市など海洋に面した世界の主要都市がどんな影響を受けるかを動画にしてネットで公開した。また米国では、過去のハリケーン被害データを1年がかりで分析、今後、気候変動で水没して失われる土地を詳細に示した。いずれも科学調査報道の新しい試みとして、注目された。

一方で、どの国もフリーランスの科学ジャーナリストが中心で、生活保護を受けながら活動する例もあるなど資金的に恵まれていない現状が報告され、大手メディアが多数のスタッフライターを抱える日本の状況と、大きな開きがあることも話題となった。

主催者の一人、ルックアウト・ステーション広報部長の椿梨奈さんは「メディアの“科学に対する価値（the value of science）”を高めるためには、研究機関とジャーナリストの連携方法が課題。欧州メディア界にも、日本の報道機関の科学デスクのように、事実確認、検証の関門となる役割がほしい」と話していた。

（理事 小出重幸）



シンポジウム会場前で記念撮影。左端が筆者



デジタル技術の革新で変わる科学報道の現状と未来について議論が白熱（撮影 いずれも小出重幸）

ふたつの正義の共存を模索 「おクジラさま」上映会を開催

科学ジャーナリスト賞2018を受賞した佐々木芽生さんが監督・制作したドキュメンタリー映画「おクジラさま ふたつの正義の物語」の特別上映会が9月3日、JASTJ主催により東京・内幸町の日本記者クラブで開かれた。参加者は約90人。映画鑑賞の後、ニューヨークを拠点に活動する佐々木さんは受賞式以来の元気な姿で登壇し、米国での初公開の反響などを語った。

グローバル対ローカル

長年イルカ追い込み漁を続ける和歌山県太地町の漁師を「悪」に仕立てた映画「ザ・コーヴ」に衝撃を受けて、佐々木さんは2010年から現地取材を始めたという。制作映画は、海外から続々と来る反捕鯨活動家や漁業者ら町の人びとを丁寧に追っていた。

「取材していくうちに捕鯨・イルカ漁の問題から、グローバル対ローカルの問題だと気が付いたのです。ハリウッドという巨大メディアが攻撃的権力ではなく小さな漁村に向け、何百年も続いた村の生活習慣や誇りをかき乱す。米国でザ・コーヴを批判する声が多く出ないのは、情報の欠如からくる」と佐々木さん。念願だった米国での公開上映はこの夏にかなった。



米国での公開上映の反響について話す佐々木芽生さん

「上映して初めて論評してもらえる映画界。結果は賛否両論、でも予想以上に好意的だった」という。「ワシントンポストやこれまで捕鯨問題に保守的だった英国のザ・ガーディアンが好意的に扱ってくれたのはうれしかった。ただ、ニューヨ



上映会会場の日本記者クラブAホールには約90人が詰めかけた

(撮影 いずれも柏野裕美)

ークタイムズが、ザ・コーヴを大絶賛した記者の表面的な記事を掲載していたのだけは残念だった。でも大学や高校の先生などから教材として使いたいと言われました」と、手応えを感じた。

獣医師で国際捕鯨委員会(IWC) 委員も務めた国立科学博物館の林良博館長がコメンテーターとして登壇し、「日本人は動物を殺すこと自体に抵抗感があるが、欧米では残虐な飼育方や殺し方を問題にする。広い海で生きるイルカを狭いところに閉じ込めるのも残酷だと考える」と動物管理思想の違いを解説。フロアからも科博の元職員でクジラ研究者の山田各さんが「日本ではクジラ、イルカを経済流通の対象として水産庁が担当しているが、野生生物として環境省などが管理してほしい」と提言するなど、話は海洋環境の保全に及んだ。

今回、JASTJは米国での上映活動を応援したが、「来年7月にスイスで開かれる科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)でもこの映画を手掛かりに議論するよう提案している」とJASTJの小出重幸国際委員長。世界に問う「ふたつの正義」を今後もフォローしていきたい。この日の参加や寄付による協力にこの場を借りてお礼申し上げます。(会長 佐藤年緒)

科学ジャーナリスト賞2019 候補作の募集開始

科学ジャーナリスト賞2019の候補作について会員が自由に話し合うJ賞カフェが7月7日、JASTJ事務局(東京理科大学神楽坂キャンパス)で開かれた。J賞選考委員会の柴田鉄治委員長、佐藤年緒会長をはじめ10人が参加、候補作に関して意見交換し2019年度の科学ジャーナリスト賞選考にあたっての課題などを話し合った。

19年度の候補作は7月から募集を始め、7月7日時点で5作品の推薦があった。世界でただ一人のサメジ

ャーナリストである沼口麻子さんの著書「ほぼ命がけサメ図鑑」、STAP細胞問題で15年度に科学ジャーナリスト大賞を受賞した須田桃子さんの著書「合成生物学の衝撃」などが話題に上がった。NHKスペシャル「人類誕生第1集 こうしてヒトが生まれた」の録画を参加者全員で見ながら互いに批評を交わした。

また、18年度の選考過程で課題に上った「人物を授賞の対象にする」ことについても議論した。18年度最終選考では科学者やジャーナリストの生涯にわたる業績を評価するのは困難であるとの判断からいったんは見送ったが、方策がないかを今後も議論することになっている。(副会長/J賞委員長 滝順一)

「科研費の100年」テーマに 日本学術振興会と懇談会

JASTJは8月23日、「科研費の100年」をテーマに日本学術振興会（JSPS、略称学振）との懇談会を開いた。大学などの学術研究を支える科学研究費補助金（科研費）の歴史を振り返りながら、ジャーナリストとの意見交換を通して今後の研究助成の在り方などを話し合った。東京・麹町の同振興会本部の会場には、JASTJ会員のほか学振の職員らも集まった。懇談会後には近くのレストランに約40人が集まり、自由に議論を交わした。

科研費の現状と改革

懇談会では初めにJASTJの佐藤年緒会長が「JSPSを見える化してほしい」と挨拶、その後に学振の家康弘理事が科研費の推移や現状について講演した。科研費は全研究分野を対象に、研究者からの提案をもとに採択して配布するボトムアップ型研究費だが、「ここ数年で応募件数は年間10万件程度まで増えた」という。その背景にあるのが、各国立大学の基盤を支える経費とされる運営費交付金の削減。2004年から合計1450億円ほど減少したため、その分を補おうと科研費への応募が増加した。また運営費交付金や科研費が東京大学などトップの大学に集中、地方の国立大学などへの



科研費をテーマにした懇談会場で挨拶する佐藤JASTJ会長

(撮影 いづれも柏野裕美)



講演する学振の家康弘理事（右）と同システム研究センターの永原副所長

研究資金の流れが細くなっている実態についても明らかにした。

JSPSシステム研究センターの永原裕子副所長は、科研費改革の現状について報告した。基盤的資金と競争的資金のバランスを取る「デュアルサポートシステム」が劣化しているため、研究者が新たな知に挑戦するインセンティブがなくなってきたと指摘。研究者が幅広いアイデアを実践できるよう科研費の制度改革を進めていることを明かした。すでに科研費の「種目整理」や「審査方式」の改革を実行し、一定の成果を上げているという。

制度的限界をどう突破？

懇談会に参加して「科研費は今後、研究の多様性を十分に支えられるのだろうか」という疑問を抱いた。異分野融合型の研究が進むと、審査員が判断し切れない研究アイデアも出てくる。私自身、学術系クラウドファンディング・サービスを運営する中で、500人近くの若手研究者から「細分化された研究者コミュニティから生じる弊害」をいくつも聞いてきた。会場での質疑でも出た「多様な研究にお金をバラまくべき」という理想を実現するには、国から与えられたパイを奪い合うだけではなく、研究資金の総額をどう増やすかを真剣に考える必要がある。それができなければ、日本の科学研究は衰退する一方だろう。

(会員／アカデミスト代表取締役 柴藤亮介)

第17期 JASTJ塾が開講

JASTJは9月6日、第17期科学ジャーナリスト塾の開講式を東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で行った。今期の入塾者は16期修了生3人を含む17人で、ジャーナリストやライター、塾の講師や獣医など、多彩な背景を持つ顔ぶれが集まった。開講式にはこのうち16人が出席した。

開講式では、塾運営メンバー7人とJASTJの佐藤年緒会長ら5人の理事が挨拶。この中で室山哲也塾長は

「自由闊達に議論し、お互いに触発して化学反応が起きるような下地を作してほしい」と強調。続いて運営メンバーから10回の講義や見学会の概要について説明があった。

塾生らは「伝わるように伝える技術」を学ぼうと、半年間、各々のテーマに取り組む。独自に自由なテーマで企画を立て、プレゼンテーションまたは文章で作品を作り上げる。この日は早速、企画書作成と「これが東京だ」と物語る1枚の写真を撮影するという宿題が出された。この後、塾生同士が会場を自由に歩きながら互いに話しあった後、それぞれ塾に参加した動機など自己紹介をした。(副会長／塾長 室山哲也)

虫嫌いが見た「昆虫展」

7月12日、すでに猛暑が続いていた東京・上野の国立科学博物館で特別展『昆虫』のプレス内覧会に参加した。こうした内覧会は通常、テレビや新聞、雑誌などのメディア記者を対象としているが、今回はJASTJの会員にも見学が許可された。

巨大な昆虫模型に迎えられ

今年は、さながら“昆虫イヤー”ともいえる1年だ。俳優の香川照之氏が激しすぎる昆虫愛を着ぐるみで語り、雌雄の生殖器形状が逆転した昆虫を発見した日本人研究者にイグノーベル賞が贈られた。クイズ番組では不思議な名前の昆虫が取り上げられた。婚活ならぬ“昆活”の誘いに満ちている。

格別に暑い夏に開催された昆虫展。意外なことに、科博の特別展で大々的に昆虫を取り上げるのは今回が初めてとのこと。それがどのように展示されているのか？ 私は人口の半分を占めるであろう「虫嫌い」の一人だが、その立場から見学を始めた。

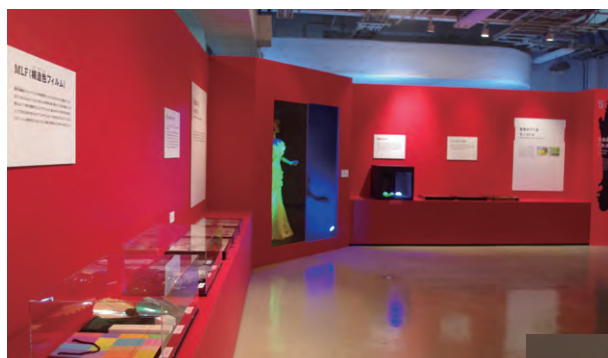
エントランスを入ってすぐ、2mの巨大な“昆虫”の展示にはすでに人だかりができていた。「うわっ、毛だ!」「変なところに穴があいてる!」——。テレビカメラが舐めるように撮影する脇で子供が叫ぶ。研究者が本気で作った精緻な巨大模型は子供だましではないリアリティに満ちている。制作の過程でいくつもの新発見があったそうだが、子供の声にも「今回初めて分かったことです」と、研究者は誇らしげだ。

会場は、元々の高い天井に加え、明るく鮮やかな壁紙が美術館のようにモダンな雰囲気を作り出す。心配になるほど贅沢に取られた壁の余白には、昆虫



巨大な昆虫模型とその監修者たち

(撮影 いずれも高山由香)



昆虫の研究から生まれた工業製品も展示されていた

「Gの小部屋」前で観覧注意を呼び掛けるユーモアあふれる標識も



の姿は無い。目玉企画の一つ、数万点もの標本がすき間なく並ぶ標本回廊を除くと、「どこを見ても虫が見えちゃう」危険も無い。嫌われ者の代名詞、ゴキブリの展示は危険ゾーン「Gの小部屋」として壁で囲われていた。

嫌いな相手に教えられること

Gの小部屋で「まうやま先生」こと丸山宗利博士（九州大学総合研究博物館 准教授）に話を聞いた。「この部屋では、ゴキブリは怖いというのは先入観ではないかと問いかけたい。視力も良くないし、意外ときれい好き。自然界のバランスでは大切な役割を持っている。決して悪者ではありません」——。私を含む大人は根拠のないイメージで判断し、気に入らない虫を殺してしまいがちだ。しかし、それは正しいことなのか。そしてそれは、虫に対してだけなのだろうか。そんな思いもわいてくる。

無益な殺生といえば、私から見ると愛好家を作る大量の昆虫標本にも同じ疑問を感じる。ストレートに投げかけた私の質問に、先生の笑顔が一瞬消えた。「虫捕りについては、議論があります。生命を感じる機会という面もありますが、殺してしまうことは必要なのか？ただ捕まえて、標本にするわけではありません。科学者はよく分からない相手がいたら、よく観察して知ろうとします」。

相手が何であれ、科学的な態度で接する努力をすることは、世界の平和につながるのかもしれない。この内覧会は、小さな虫の膨大な標本が、世界に平和をもたらすポイントも身をもって教えてくれた場であった。

(会員 高山由香)

福島原発事故から7年 JASTJ再検証委員会が活動報告

JASTJ「なんでも検証委員会」活動の一つである福島原発事故再検証委員会が6月27日、東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で6月例会を兼ねて報告会を開いた。2011年の原発事故後に政府、国会、民間、東京電力の各事故調がまとめた報告書を比較検証して本にまとめた会員が中心になって昨年立ち上げた再検証委員会が、「この事故から日本は何を学んだのか」を探るために各事故調の代表者にインタビューした。その成果をJASTJのホームページで26日に公開したのを機に、インタビュー映像と記事を紹介し、事故後7年目の日本の現状や課題について話し合った。

3事故調のインタビューを映像化

報告会の冒頭、再検証委員会の呼びかけ人の一人である林勝彦理事が挨拶に立ち、昨年6月に再検証委員会を立ち上げた経緯や、その後の活動について説明した。東京電力の協力は得られなかったが、国会事故調の黒川清・元委員長、政府事故調の畑村洋太郎・元委員長、民間事故調の船橋洋一・元プログラムディレクターの3人にインタビューできたという。報告会では、この3人のインタビュー内容をそれぞれ15分から20分弱にまとめた映像が紹介された。

国会事故調は報告書の中で、事故の根本的な原因は政・官・財の一体化による「規制の虜」であり事故を「人災」と断言、7つの提言をした。しかし黒川さんはインタビューの中で、提言が活かされたのは1つだけと明かした。この日の報告会にも参加した黒川さんは「そうした事実を国民に知らせるのがメディアの役割だ」と指摘した。

一方、政府事故調は事故原因の解明のために実物大模型による事故の検証実験を提言したが、実現しなかった。この点について畑村さんはインタビュー



インタビューに参加した再検証委員会のメンバー9人は最後にそれぞれの思いを語った
(撮影 いずれも柏野裕美)

の中で、政府に「何も考えがなだけなのでしょう」と指摘。根本的な議論をして決めることを避けてきた明治維新以来の日本社会の体質に触れ、「日本社会は原発のような巨大技術を動かせるほどの成熟度は持っていない」と断じた。

民間事故調へのインタビューでは、亡くなった北沢宏一委員長に代わって米国の手法を参考に事故調立ち上げを主導した船橋さんに聞いた。印象に残ったのは「事故の真実を検証し、その教訓をもとに十分な備えをするというサイクルを回し続けることでしか、危機は乗り越えられない」という指摘だった。そのためにも、いま一番やらなければいけないのは、原子力保安院の聞き取り調査だという。

メンバー9人それぞれの思い

映像紹介の後、再検証委員会のメンバー9人がそれぞれ思いを述べた。「技術的、科学的なことに視点が行きがちだが、それを扱う人間の倫理的な問題が大きい」「日本がどういう社会なのかが見えてきた。それを読み取ってほしい」「原子力安全神話は政府の無責任体制と密接につながっている」「事故で日本も変わるのではと思ったが、結局何も変わっていない」などの声があがった。

「失敗を恐れて隠す経済先進国の日本社会のありよう」（黒川さん）、「建前でこうだと言いながら、実態はそうでないのを放置」（畑村さん）、「レガシーの抵抗力がものすごく強い。革新することで不安を呼ぶ危機感のほうが強く、みんなでそれを閉じ込めてしまう」（船橋さん）。こうした言葉を聞きながら、リーダー不在の事なかれ主義を考えさせられた。

（会員 都丸亜希子）



船橋さんのインタビュー映像に見入る参加者たち

日本に調査報道NPOは根付くのか

渡辺周・ワセダクロニクル編集長に聞く

「日本に調査報道NPOは根付くのか」をテーマにした7月例会は27日、東京・神楽坂の東京理科大学で開かれた。講師は早稲田大学を拠点にWEBメディアで独自報道に取り組む特定非営利活動法人(NPO)「ワセダクロニクル(以下、ワセクロ)」の渡辺周(わたなべ・まこと)編集長。なぜ朝日新聞記者を辞めてまでNPOによるジャーナリズムの確立に取り組むのか、その思いを聞いた。

なぜ“探査報道”を目指すのか

渡辺さんは今の仕事について「朝日が嫌でワセクロを立ち上げた訳ではない」としながら、「たぶん、これがなかったらやっていないと思う」と話し始めた。朝日新聞は2014年に、①慰安婦報道の検証、②池上彰氏のコラム不掲載、③吉田調書の報道——の問題で社内外から厳しい批判を受け、社長が謝罪会見する事態に追い込まれた。

吉田調書は、政府事故調が東京電力福島第一原発の吉田昌郎所長に聞き取りをした内容をまとめたものだが、渡辺さんが所属していた特別報道部が2014年5月20日の朝刊一面でスクープした。しかし調書は非公開を前提に聞き取り調査したこともあり、一部から厳しい批判にさらされた。

社長の謝罪会見については当時、社員向け説明会も開かれたが、「普段、大臣や他社の社長には厳しく質問する記者達が自分の上司には何もいえない」「拳句の果てに、あまり吊るし上げない方がいいよといってくる」——。そんな経験が、渡辺さんを新しい道に踏み出させるきっかけになった。

16年3月に、大学を拠点にした早稲田探査ジャーナリズムプロジェクトの立ち上げに伴い退社、ワセ

クロの編集長に就任した。「政治的・経済的・社会的権力が公開されることを望まずに意図的に隠している事実、またはそれら権力が偶発的に隠している事実を、気づき、調査し、発掘し、ストーリーとして構成したニュースを最終的に公衆に向けて暴露する」(同社ホームページ) 事実探査型ジャーナリズムを目指し、今



渡辺周・ワセダクロニクル編集長 (撮影 佐藤年緒)

は月に数本の記事をWEB中心に掲載している。

世界には非営利組織が調査報道を担う確かな潮流があり、「世界探査ジャーナリズムネットワーク(GIJN)」には65カ国155団体が参加している。ワセクロは日本の組織としては初のオフィシャルメンバーになった。

戦えばカネはついてくる

講演で、渡辺さんは非営利探査報道機関の成功例として韓国の「ニュース打破(タパ)」を紹介した。現在4万人の賛同者による寄付で経営が支えられているが、代表者のキム・ヨンジン元韓国放送公社(KBS)調査報道局長には「まず自分達がリスクを取って戦え」「突き抜けて戦えば、カネはついてくる」と激励されたという。

その渡辺さんが「他のメディアではできないことをやりたい」と、ワセクロ設立に当たって創刊特集にしたのが「買われた記事」。読者には公正な報道と思われる新聞記事に製薬会社のおカネが入っていた事実を暴いたものだ。

大半のメディアが購読料と広告料で成り立っているが、寄付文化の未熟な日本で調査報道の非営利組織を成立させるのがワセクロの挑戦の一つだ。350万円を目標にクラウドファンディングで寄付を募り、550万円が集まった。ヨンジンさんの助言をいかすことができた。「毎月1000円出してくれる人が1万人いれば回る」と渡辺さんはいう。

フェイクニュースやヘイトスピーチまがいの情報があふれるネット社会が広がるいま、ジャーナリズムの原点を改めて考えさせられた。(会員 寺沢和洋)



NPOによるジャーナリズムの可能性について話を聞く参加者 (撮影 柏野裕美)

文系フリーランスが取り組んだ サイエンスライター

はじめまして。フリーライターの石田雅彦と申します。私がサイエンス系の記事を最初に書いたのは1992年頃でした。大学を出て入社したのは映画や芸能関係の出版社で、そこで私は編集記者として10年ほど働かせていただいた後、1991年に独立して編集プロダクションを立ち上げ、自身もフリーライターとして仕事を始めていました。

「恐竜」入り口に科学取材

ちょうどマイケル・クライトン原作の映画「ジュラシック・パーク」の第一作目が公開され、恐竜に関する新学説も話題になっていた頃でした。芸能出版社時代に縁のあったシリウスエンタープライズという旅行代理店の鈴木賢一社長から集英社の編集者を紹介され、米国の恐竜研究者のフィールド調査に同行し、同社の青年向け週刊誌と月刊誌に連載記事を書かないかということになったのです。

その後も遺伝子やロボットなどのサイエンス系の本を執筆して出版したり、ゴーストライターとして著名人にインタビューして話をまとめ単行本化する仕事をやっていました。青色発光ダイオード(LED)の研究でノーベル物理学賞を受賞した米カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)の中村修二教授の単行本にも企画編集ライターとして10冊ほど参加しました。内容は人生訓のようなものだったとはいえ、材料物性や半導体の知識も付け焼き刃で、中村教授が文系出身の私にわかりやすく説明してくれたことには深く感謝しています。

取材中によくいわれたのが「石田さんは文系だから(私の話が理解できないのも仕方ない)」という言葉でした。人の話を聞いてそれを文章に書いてま



1992年に恐竜取材班の一員として参加した筆者(右端のサングラス)。最前列はカナダ・アルバータ州ロイヤルティレル博物館のフィル・カー博士(左)と取材団長のSF作家の小松左京氏。(写真はいずれも筆者提供)

とめるという文系のリテラシーと、ものごとを理詰めで考え、仮説を立てて立証する理系リテラシーの違いに戸惑っていたのも事実で、理系リテラシーのな



2002年に取材した米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校の中村修二教授(左)と筆者。

いまま、サイエンス系のライターを続けていくことに不安があったというわけです。

56歳で挑戦した医学修士

それなら理系リテラシーを身につけてやろうと一念発起し、横浜市立大学の医学部大学院の修士課程に入ろうと考えたのは私が56歳のときでした。これも無謀な挑戦だったといえるでしょう。一般市民にわかりやすく科学技術について伝えるコミュニケーションについて研究したいという私の志望動機に、快く研究室に受け入れてくれた横浜市立大学の石川義弘教授には本当に感謝しています。

医療従事者のコミュニケーションスキルと患者のヘルスリテラシーというテーマで、私が修士論文にまとめたのが禁煙サポートの地域連携についてでした。修士を修了後、Yahoo!ニュースなどにたばこ問題の記事を書いていくうち、まだまだ研究を続けたいという気持ちがむくむくとわいてきて、2018年4月から同じ大学院の博士課程に入り、公衆衛生の観点からたばこ問題について研究をしています。

ネットメディア隆盛で紙媒体が衰微しつつある中、フリーライターで食い扶持を稼ぐのは大変なことです。ありがたいことにYahoo!ニュースに記事を書かせていただきながら、なんとか学業との両立を続けていけています。こうした機会を与えていただいたYahoo!にも深く感謝しています。

ということで、皆さまのおかげでなんとかこれまで生きてこれました。日本科学技術ジャーナリスト会議の会員の皆さま、2017年末入会の新参者ですが、今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

(会員／フリーライター 石田雅彦)

日本でMeToo運動が低調な背景

元TBSワシントン支局長にレイプされたと訴える伊藤詩織さんが書いた『Black Box』（文芸春秋）には、人口10万人当たりの国別レイプ件数が紹介されている。1位はスウェーデンで58.5件。米国は3位35.9件、フランスが23位17.5件である。日本は87位、わずか1.1件だ。

国連薬物犯罪事務所の2013年のデータだという。これを見て「日本はレイプがほとんど起こらない素晴らしい国だ」と思う人はいないだろう。数字は警察への届け出件数であり、ここからわかるのは「レイプが事件にならない国」「女性が泣き寝入りを強いられる国」という日本の姿だ。

伊藤さんは、背景に警察の女性比率の違いがあると指摘する。スウェーデンは31%、日本は8.1%。確かに男性警官相手にレイプ被害は訴えにくい。しかも、スウェーデンにはレイプ被害者を助ける緊急センターがある。そこに行けばいつでも検査や治療をしてもらえ、ここから多くの被害者が警察に届け出るという。

だが、違いはそこにとどまらない。私が痛感するのは教育の違いである。スウェーデンの性教育は有名だ。中学の理科で生殖の仕組みや避妊具の使い方を教えるだけでなく、「妊娠中絶が合法的な国と禁止

されている国があることを説明し、生徒たちに賛成・反対を討論させる」「性病について学び、かかったときの義務と責任を学習する」といった授業もする。

社会科の教科書には、「もし、あなたが自分の性について悩みがあるときは『性についての情報全国協会』または『性の平等についての全国協会』に相談しなさい」「暴力的に性関係を強制すること－強姦－は、私たちの犯罪の中で最も重大なものとされている」といった記述がある。

一方の日本は、02年に東京都日野市の七生養護学校（当時）で進められていた实际的な性教育を一部の保守系政治家が問題視し、東京都教育委員会が「行き過ぎ」と判断したという「事件」が起きた。あの事件の後遺症で、科学的知識を十分に与えず、「性は隠すもの」という規範だけを植え付ける「日本型の性教育」が今も続いていると思うと、いたたまれない思いだ。

セクハラ被害を告発する「MeToo」運動が日本では盛り上がりがないと言われる。義務教育のあり方を省みれば、しごく当然と思える。スウェーデンでは、学校の任務を「生命、自由、人権、男女の平等、弱者への連帯感の尊重などを生徒に身につけさせること」と定めている。（理事 高橋真理子）

WEB編集長から

JASTJのホームページをご覧いただきありがとうございます。2018年6月から8月にかけてのウェブ関連の報告をします。

■ 原発事故再検証委員会の成果を掲載

「3つの原発事故調・元委員長らにインタビュー」のページを設けました。JASTJ会員の有志9人が立ち上げたなんでも検証プロジェクト「福島原発事故のその後を再検証」（福島原発事故再検証委員会）で実施された、福島原発事故の政府事故調査委員会、国会事故調査委員会、民間事故調査委員会の元委員長や元プログラム・ディレクターへのインタビューなどの内容を、映像コンテンツと文字コンテンツで伝えるものです（今回の『JASTJ News』の6月例会報告記事には、委員会みなさんの活動成果報告のようすもありますので参照ください）。

ページを構成する各材料を、委員会みなさんにご用意いただきました。映像や記事だけでなく、インタ

ビュー対象者3人と事故後の福島第一原発の写真が並んだイメージ画像なども再検証委員会が用意したものです。充実した内容となっていますので、ぜひご覧ください。URLはhttps://jastj.jp/valid/valid_06/top/。「JASTJ事故調インタビュー」などと検索してもアクセスできます。

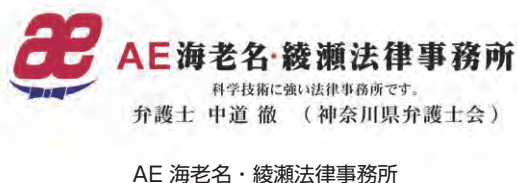
■ 科学ジャーナリスト塾 修了者の声

科学ジャーナリスト塾の運営担当のみなさんが「科学ジャーナリスト塾 修了者の声」を集め、お二人の「声」をホームページに掲載しました。第4期修了者の伊藤恵理さんと、第16期修了者の小野梨奈さんから、塾に参加した動機や、受講してみてもの感想、またいまの活躍ぶりなどをご寄稿いただきました。ありがとうございます。

今後も「修了者の声」を充実させていければと思っています。塾修了者みなさんの寄稿ご協力をよろしく願います。（Web編集長 漆原次郎）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2018年9月現在)



エルゼビア・ジャパン株式会社

東京理科大学



花王株式会社

株式会社東芝



国立研究開発法人 科学技術振興機構

株式会社日本医工研究所



カクタス・コミュニケーションズ株式会社

日本学術振興会



株式会社構造計画研究所

ロート製薬株式会社



賛助会員募集中

サントリーホールディングス株式会社

■ 新入会員の自己紹介

● 大塩 立華 (電気通信大学)

博士 (医学)。専門は脳科学、サイエンスビジュアルゼーション。科学イベントの司会、ファシリテーターからディレクター、ライター、デザイナー等として活動しております。

● 清水 健 (BBC)

大学・院で物理学と応用数学を学んだ後、BBCで国際報道に携わっていましたが、福島第一原発事故以降、科学の知識とメディアでの経験を活かしたいと考えるようになり、科学コミュニケーション／科学ジャーナリズムの日英比較を研究しております。

● 富樫 一天 (株式会社住化分析センター)

子どもの頃から文章を書くことに興味があり、小説を書いてきました。仕事は医薬品開発の支援をするCRO業務です。いまは営業で企画などを担当しております。プライベートで小説を書く以外にもWeb記事を執筆しております。

退会

森素子、近藤龍治、渡辺奈生己、小西琢真

■ お知らせ

● JASTJ会員向けメーリングリスト (ML) は2種類あります。

① info-jastj@jastj.jp

全会員を対象としたML。件名欄に「JASTJからのお知らせ」が入る。月例会の案内など、すべての会員に呼びかけるもので、JASTJ事務局のみが発信できる。

② kaiin-jastj@jastj.jp

受信希望をする会員を対象としたML。会員が携わるイベントの告知など、おもに情報共有のために受信を希望する会員に呼びかけるもので、kaiin-jastj@jastj.jp のアドレス宛で発信できる。

(注) メールアドレスを変更した会員は、これらのMLを受信できません。かならずメールアドレス変更を事務局に連絡ください。また、info-jastj@jastj.jp や受信希望しているkaiin-jastj@jastj.jp のメールがしばらく届いていない会員も事務局 (hello@jastj.jp) まで連絡してください。(総務・財務委員長 漆原次郎)

会員の BOOKS

新刊紹介

デジタル世界の光と影—アナログからの贈りもの

大江秀房著 (ポイジャープレス・1760円＋税・2018年8月)

基礎研究の危機が叫ばれる中、日本の科学技術の流れをデジタルとアナログという新しい視点から見直し、科学技術を発展させる道しるべを提示。すでに昨年電子書籍を刊行したが、読者からの「紙書籍に対する強い要望」に応えるべく、大幅に改訂して電子書籍と紙書籍を同時刊行。コンピュータ導入後の研究手法の劇的変化をはじめ、AIとくにディープラーニングについても詳述。また、人間の脳に備わる「あいまいさ」や「遊び」と「閃き」の関係など興味あるトピックスを満載。(理事 大江秀房)



気象と気候のとらえ方 きまぐれな大気の物理を読み解く

マーク・デニー著・保坂直紀訳 (丸善出版・3400円＋税・2018年7月)

米国で一般向けに書かれた科学書の翻訳。気象や気候に絡む大気の物理を、「複雑系としての大気システムが宿命として抱えるカオス性」という根本的な原理にさかのぼって解説している。それが、けっして難解ではない。数式も使わず、不思議とわかりやすい。帯の惹句にある「魔法の本」は、そういう意味だ。数学好きにもお天気好きにも好適な珍しい気象本。翻訳本の出版は初めてだ。英文は簡潔でわかりやすいのに、そのまま日本語に訳すと、とたんにわかりにくくなる。科学を説明するというのはどういう作業なのか、身に染みてわかった。機会があれば、ぜひ翻訳にトライすることをお勧めしたい。

(理事 保坂直紀)



ゼロからはじめる！ 統計学見るだけノート

監修：永野裕之 (株)宝島社・1200円＋税・2018年6月

「ビッグデータ」などの用語が朝の情報番組でも注釈なしで使われる。しかし、統計学の入門書を開いても、複雑そうな数式やグラフ、厳めしい専門用語に心が折れてしまう。そんな、「入門書を読みたくても心が受け付けない人」が本書の読者だ。紙面の三分の二はイラストで、従来は必須と言われた数式も登場しない。トップクラスに敷居が低い本書を開き、まずは抵抗感を減らして統計学の入り口を覗いて欲しい。大丈夫、怖くないから。この新刊紹介を担当した高山も原稿協力として参加した。

(会員 高山由香)

編集
後記

▶今号は大変盛り沢山な内容になりました。「おクジラさま」上映会や日本学術振興会との懇談会は本来なら1ページ使って紹介したいところですが、誌面の都合上、ニュース欄にしました。編集者としては面割に苦しましますが、それだけJASTJの活動が活気づいているといえ、喜ぶべきでしょう。▶そんなこともあり、今号から柏野さんに加え、倉又さんにも副編集長になっていただきました。出版の編集の仕事をしていただくとのこと、頼もしい限りです。(鞆)

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 東京理科大学1号館13階
Email: hello@jastj.jp
会長 佐藤年緒／事務局長 山本威一郎
編集長 高木勲生／副編集長 柏野裕美、倉又茂